

幼児の向社会的行動の表出に影響するものはなにか — 対人的信頼感と親和動機との関連から —

内山有美・笠井由美

What affects the expression of prosocial behaviour in preschool children?
— The relationship between interpersonal trust and affiliation motives. —

Yumi UCHIYAMA and Yumi KASAI

ABSTRACT

This study aimed to investigate prosocial behaviours among preschool children. Ten types of prosocial behaviour were identified during a garden observation task among 4- and 5-year-old children, namely helping, cooperating, sharing, distributing, teaching, suggesting, inviting, nursing, caring, and encouraging.

These behaviours were categorised into three behaviour groups (cooperative, teach-suggesting, and nursing behaviour groups) according to the similarity of their contents, and the relationship between prosocial behaviour groups, gender, and awareness of others (interpersonal trust and affiliation motives) were statistically analysed. Results showed significantly greater prosocial behaviours among boys than girls in the cooperative behaviour group, and girls than boys in the nursing behaviour group.

In addition, children with low affiliation motives performed more prosocial behaviours in the nursing behaviour group than their high affiliation counterparts.

These results suggest that the expression of prosocial behaviour differs by gender, not because of affinity for others. Thus, this study demonstrated the tendency of prosocial behaviours in a small group of preschool children. Further study in this area is recommended to facilitate increased generalisation of findings.

KEYWORDS : prosocial behaviour, interpersonal trust, affiliation motives, preschool children

問題と目的

平成25年から平成30年の間で保育園への申込者数は全国で42.3万人と増え（厚生労働省, 2017）、近年は多くの子どもが日中を保育園で過ごしている。保育園での集団生活は、同年代の他者の行動やその結果を学ぶという点において、多くのモデリング学習の機会がある。これまでもモデルの行動が及ぼす学習者の向社会的行動への影響についての研究から（Elliot & Vasta, 1970；森下, 1990；Owens & Ascione, 1991）、モデル行動の観察は、学習者の向社会的行動を高めることが確認されている（Elliot

& Vasta, 1970）。このように集団での生活はモデル行動の観察学習や、行動実行による結果を体験的に学ぶ絶好の環境とも言える。さらに、Elliot & Vasta（1970）は、モデル行動の観察に加えて言語的な社会的報酬（例えば「John（モデル）はよい子ね」といったフィードバックなど）がある場合に、学習者の向社会的行動がさらに高められるとしている。向社会的行動は他者からの反応による影響を受けやすく、他者からの肯定的な反応は（例えば、感謝の言葉を受けたり、笑顔で返されるなど）、向社会的行動の強化につながる（Eisenberg, Cameron, Tryon, & Dodez, 1981；Eisenberg & Fabes, 1998）。このよ

うに、集団の中での向社会的行動はモデルによって適切な行動を学ぶことが可能であり、同時に、他者からの評価を受けて強化、もしくは改善の機会を得やすい行動と考えられる。

幼児の向社会的行動については援助や分与、共感的関心といった行動の種類によって捉えた研究や（伊藤・丸山・山崎，1999；Strayer, Wareing, & Rushton, 1979；Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner & Chapman, 1992）、行動の自発性や（Eisenberg, Cameron, Tryon, & Dodez, 1981；伊藤・丸山・山崎，1999）、効果性（若林，2003）によって向社会的行動を捉えたものもある。他にも、援助行動に着目し、情緒的、物質的などの援助方略によって向社会的行動を捉える（伊藤，2006；渡辺・高野，1986）など、研究者により重なり合う部分を持ちながらも様々な観点で向社会的行動についての研究が行われている。また、幼児の向社会的行動の測定においては、自己報告形式での質問紙を適用するのは困難であることが多い。そのため、イラスト図版や映像を用いた物語課題を提示し、登場人物の行動について尋ねる言語的課題による調査や（伊藤，1997；溝川，2011；Peterson, 1980；渡辺・高野，1986）、自由遊び場面の自然観察（伊藤，2006；伊藤・丸山・山崎，1999；島・黒岩，2017；首藤，1995）などが多く採用されている。他にも、実験場面の刺激に対する反応を測定する（Dreman & Greenbaum, 1973；Elliot & Vasta, 1970；森下，1990；Peterson, 1980）など、様々な手法で幼児の向社会的行動の測定がなされている。

本研究では、幼児の園内での自由遊びの様子を観察することで、集団生活の中でみられる向社会的行動の種類や出現数について調査することを目的とする。さらに、向社会的行動を引き起こしている内面的な要因として対人的信頼感と親和動機を取り上げ、変数間の関連を検討する。

対人的信頼感とは乳幼児以降の愛着にかわる他者との信頼関係を示すもので（酒井他，2003）、その対象となる特定の他者は母親・父親（藤原・牧，2007）、親、児童担当職員、友達、まわりの大人（酒井他，2003）があげられている。こういった子ども

が抱く信頼感、依存・退行といった対人行動（藤原・牧，2007）や絶望感や時間的展望（谷，1998）にも影響するとされる。このように対人的信頼感は、幼児が他者との関係性の中で抱く内面的な要因であり、社会的行動にも関わることが考えられる。本研究では保育士と友達に対する信頼感が、向社会的行動にどう影響するのかについて関連を検討する。

親和動機とは社会的動機の一つであり、自分の味方になる人に近寄り、よろこんで協力したり、好意を交換することに関わる動機である（Murray, 1964；八木沢，1966）。保育園で友達や親以外の大人といった他者との関係に広がりが見られる中で、他者との友好関係の形成に関わる動機は対人行動を方向づけるものとなるだろう。本研究では親和動機が向社会的行動を引き出すものとして着目し、親和動機による向社会的行動への影響を調べる。

方 法

調査実施時期 2019年9月、10月

調査参加児 徳島県内の認定こども園の4歳児の1クラス（幼児18名）を対象に行った（年齢範囲＝4歳6か月～5歳5か月）。

倫理的配慮 調査協力園と調査参加児の保護者に対して、研究の概要や目的、得られたデータの使用目的や匿名化の方法、研究協力の中断や辞退の自由について口頭および文書で説明し、研究参加についての同意書を得た上で実施した。

1. 手続き

(1) 対人的信頼感と親和動機についての個別面接調査

面接調査は園の協力のもと自由遊びの時間帯に、個別面接用の個室を利用して実施した。面接者は筆者と第2筆者の2名で、参加児全員がいずれかの面接者による調査を受けられるよう行った。面接の順番は名簿順で行ったが、参加児の降園時間や遊びへの熱中状況等によって順番が前後することもあった。

個別面接を始める前に、幼児の緊張を和らげ回答しやすい雰囲気になるようペープサートや手品を見せてから面接を始めた。調査の実施にあたって、参

加児には「言いたくないことは言わなくていいよ」「途中でやめたくなったらやめてもいいよ」「思ったことを答えてね」などの教示を行った上で進めた。質問の際には性別に対応し、参加児の名前を“くん”と“ちゃん”で呼び分けて実施した。所要時間は15分程度であった。

(2) 向社会的行動についての自然観察

向社会的行動に関する行動観察は、面接調査の3週間後に実施した。時間帯は参加児が登園し始める9時頃から昼食までの約2時間で、園庭での自由遊びの中でみられる向社会的行動についての観察を行った。観察者は調査内容や目的、向社会的行動に関するレクチャーを受けた大学生(4名)と筆者の5名であった。参加児は異なる観察者による2回の行動観察がなされるよう、観察のタイミングを分けて幼児1人につき各10分間の計20分間の行動が記録された。

2. 調査内容

(1) 個別面接における調査内容

質問項目については、項目数が幼児の負担とならないか、項目内容は分かりやすい表現になっているか、第2筆者との協議によって決定した。さらに、現役保育士2名(保育歴15年以上)に項目数と内容の分かりやすさの確認を依頼し、分かりにくいとされた項目については修正した。

対人的信頼感 酒井他(2003)、藤原・牧(2007)を参考に、保育士や友達に対する信頼感に関する質問項目を作成した。質問項目は保育士や友達を「あなたの周りの人は」とし、これに続き「○○くん(ちゃん)のことを好きだと思いますか」「○○くん(ちゃん)と一緒にいて楽しそうですか」「○○くん(ちゃん)を大事にしてくれますか」「○○くん(ちゃん)が楽しそうにしていると嬉しそうですか」「○○くん(ちゃん)が元気がないと心配しますか」の5項目を用いた。

親和動機 藤枝・新井(2009)の児童用親和動機尺度を参考に、保育士と友達に対する親和動機についての質問項目を作成した。質問項目は具体的他者との関わりを想起して回答しやすくするため、

保育士と友達を分けて質問を行った。質問項目は「保育園の先生ともっと一緒にいたい」「保育園の先生に○○くん(ちゃん)のことをたくさんお話したい」「保育園の先生ともっと仲良しになりたい」「お友達ともっと一緒にいたい」「お友達に○○くん(ちゃん)のことをたくさんお話したい」「お友達ともっと仲良しになりたい」「たくさんのお友達を作りたい」の7項目であった。

回答方法 幼児が回答する際には、大きさの異なる3つの丸(薄い灰色)が描かれたホワイトボードを用いて、項目ごとに自分の気持ちに一番近い大きさの丸に赤マグネットを貼ってもらうことで回答を得た。質問を始める前に、「例えば、“アンパンマンが好きです”について、あまり好きじゃなかったら小丸、好きだったら中丸、すごく好きだったら大丸」と指で示しながら説明し、該当する丸にマグネットを貼るよう例示した。(得点範囲: 対人的信頼感は5点~15点、親和動機は7点~21点)

(2) 自然観察による向社会的行動の測定

伊藤・丸山・山崎(1999)の観察分類カテゴリーに従い、身体的援助(例えば、手伝い、手助けなど)、言語的援助(例えば、助言、提案など)、慰め(例えば、気遣い、励ましなど)、協力(例えば、共同など)、分与(例えば、分配、物の共有など)に相当する言動や行動が発生した場合に、向社会的行動の表出として記録した。観察者2名が記録した向社会的行動の合計数を用いて、幼児個人の向社会的行動の評定結果とした。

結 果

1. 記述統計

向社会的行動の出現数と対人的信頼感、および親和動機の平均値と標準偏差をTable 1で示す。さらに、各変数の関係を検討するため相関分析を行った。いずれの変数も得点分布に偏りがあるため、スピアマンの順位相関係数を算出した。その結果、向社会的行動と親和動機に中程度の負の相関が認められた($r = -.50, p < .05$)。向社会的行動と対人的信頼感との間には有意な相関はみられなかった。

2. 自由遊びの中での向社会的行動の種類と出現数

伊藤・丸山・山崎（1999）の観察分類カテゴリーにしたがい行動の記録を行ったが、同様の行動であっても観察者によって異なる観察分類への振り分けがみられたため、収集された全ての行動について KJ 法により内容の類似性に基づく分類を行った。その結果、10種類の向社会的行動（①手伝い、②協力、

③共有、④分与、⑤教示、⑥提案、⑦誘い、⑧養護、⑨気遣い、⑩励まし）が抽出された。Table 2 に種類ごとの行動例と出現数を示す。

3. 向社会的行動の出現数における性差

10種類の向社会的行動について詳しく検討するため、さらに内容が近いものをまとめて、協同行動群

Table 1 変数の平均値と標準偏差、および変数間の相関係数

	平均値	標準偏差	相関係数		
			向社会的行動	対人的信頼感	親和動機
向社会的行動	6.72	2.08	—		
対人的信頼感	12.22	2.05	-.20	—	
親和動機	16.56	3.18	-.50*	.28	—

* $p < .05$

Table 2 向社会的行動の具体例と出現数および割合

種類	種類別の具体例	出現数	割合	群別出現数	群別割合	
協同行動群	手伝い	・ 女兒が「誰か、お茶飲むけん、お茶のふたあけて」と言ったところ「分かった、おれがあける！」	14	12%	60	49.6%
		・ 「〇〇先生にお団子届けてきて」と頼まれて運ぶ				
		・ 「丸太もってきて」と言われ、先生に頼みにいく				
	協力	・ 積み木を一緒に組み立てる	24	20%		
		・ 壊れた部分を友だちと一緒に直す				
		・ 友だちと泥と水を使って泥団子を作る（牛乳パックに水を入れて泥にかける係）				
	共有	・ シールの裏面の香りをかきあって笑い合う	12	9.9%		
		・ つかまえたカエルを「見せて」と言われて見せてあげる、触らせてあげる				
		・ 畑で見つけた丸いきれいな石を友だちに見せ、同じものをみて「きれいだね」と言い合う				
	分与	・ 作った泥団子を「投げさせて」と頼まれ、渡してあげる	11	9.1%		
・ ウンテイで友だちに順番を譲ってあげる						
・ 木に吊り下がっている丸太のブランコを次の人に渡す						
教示・提案行動群	教示	・ ジャンプして高く飛ぶためのコツを伝える	5	4.1%	27	22.3%
		・ 寒いという友だちに「ポケットに手入れたら？」と言う				
		・ 「これで取り」と適切な道具を渡す				
	提案	・ 「これ（どんぐり）で玉入れするのはどう？する？」と言い、一緒に遊ぶ	11	9.1%		
		・ 木の板が危なくないこと、ななめに立てかければ滑り台になることを助言する				
		・ 「つぎ、かくれんぼしよう」と次の遊びを提案する				
	誘い	・ 「仲間になる？」と言い、かくれんぼに連れてあげる	9	7.4%		
		・ 団子づくりに必要な水をくみ、運んでくる。そして「おーい！みんな水もってきたよ！」と言う				
		・ 「先生も（基地に）入っていいよ」と誘う				
	養護行動群	養護	・ 「〇〇ちゃん、離れとき」と安全なところへ連れていく	10		
・ 小さい子を誘導しながら、失くしたものを一緒に探してあげる						
・ 山に登る友だちの手をひいてあげる						
気遣い		・ 大きな石をもつ友だちに「もてる？」と気にかける	16	13%		
		・ 友だちのお尻についていた砂を払ってあげる				
		・ 「つかれる？つかれたんだったらみんなに言って休憩する？」と聞く				
励まし		・ すねてしまった友だちを呼びに行く	9	7.4%		
		・ 仲間外れにされ、泣いてしまった友だちへ「一緒にあそびにいこうよ」と言う				
		・ 転んだ子（小さい子）に対して、背中をそっとさわる				
全体			121	100%	121	100%

(①協力, ②手伝い, ③共有, ④分与), 教示・提案行動群 (⑤教示, ⑥提案, ⑦誘い), 養護行動群 (⑧養護, ⑨気遣い, ⑩励まし) という3つの行動群を作った。この行動群それぞれの合計出現数について, 幼児の性別による違いがみられるか検討するため Mann-Whitney の検定を行った。その結果, 協同行動群と養護行動群で有意な性差が認められ, 協同行動群では男児が女児よりも多く, 養護行動群では女児が男児よりも多くの行動をとっていることが明らかとなった (Table 3)。

4. 向社会的行動と対人的信頼感, 親和動機との関連

対人的信頼感と親和動機について平均値を基準に高低群に分け, Mann-Whitney の検定により向社会的行動の出現数に違いがみられるか検討した。その結果, 養護行動群で親和動機の低い幼児が高い幼児よりも多くの行動をとっていることが明らかとなった。向社会的行動と対人的信頼感との間に関連はみられなかった (Table 4)。

考 察

1. 向社会的行動の種類と出現数

本研究では自然遊びの中でみられる向社会的行動について, その種類と出現数について観察調査を行った。その結果, 10種類の向社会的行動を確認し, さらに類似性の高い3つの行動群にまとめた。

協同行動群は①手伝い, ②協力, ③共有, ④分与を示す行動を含み, 同じ目標を持った仲間との関わり合いでみられる言動や, 仲間と同じものを見て触り共感しあう行動であった。例えば, 木片や泥を使った基地を作る際に, 泥を作るための水を一緒に運んだり, 壊れた部分を協力して修復したり, カエルを捕まえ仲間と共有したり, 仲間が投げる泥団子を作ってあげるなどの行動があった。これらは身体的な行動が多く, 友達から言葉の要請や依頼が無くても自発的に働きかける姿であった。

次に, 教示・提案行動群は⑤教示, ⑥提案, ⑦誘いを示す行動を含み, 言語を伴う行動が多かった。例えば, 遊びの中で見られる助言として, 高くジャ

Table 3 性別による向社会的行動の出現数の比較

	協同行動			教示・提案行動			養護行動		
	平均値	標準偏差	U 値 (効果量 r)	平均値	標準偏差	U 値 (効果量 r)	平均値	標準偏差	U 値 (効果量 r)
性別									
男児 (n = 10)	4.00	1.33	12.50*	1.30	.95	<i>n.s.</i>	1.40	1.71	13.50*
女児 (n = 7)	2.43	.98	(.55)	2.00	1.41		2.86	1.57	(.53)
			男児 > 女児						女児 > 男児

* $p < .05$

Table 4 高低群による向社会的行動の出現数の比較

	協同行動			教示・提案行動			養護行動		
	平均値	標準偏差	U 値 (効果量 r)	平均値	標準偏差	U 値 (効果量 r)	平均値	標準偏差	U 値 (効果量 r)
対人的信頼感									
高群 (n = 9)	3.33	1.23	<i>n.s.</i>	1.67	1.12	<i>n.s.</i>	1.89	1.45	<i>n.s.</i>
低群 (n = 8)	3.38	1.69		1.50	1.31		2.13	2.17	
親和動機									
高群 (n = 7)	3.33	1.21	<i>n.s.</i>	1.50	0.55	<i>n.s.</i>	0.83	1.17	10.50*
低群 (n = 10)	3.50	1.58		1.50	1.43		2.70	1.83	(.60)
									低群 > 高群

* $p < .05$

ンプするコツを友達に教えたり、かくれんぼを一緒にやろうと誘うなどがみられた。

最後に、養護行動群は⑧養護、⑨気遣い、⑩励ましを示す行動を含み、言語を伴う行動と身体的な行動のどちらも含まれた。例えば、仲間外れになり泣いている子に「どうしたの？」と声をかけたり、小さい子を安全な場所に誘導するなどがみられた。

3群の出現数の割合をみると、協同行動群は49.6%、教示・提案行動群は22.3%、養護行動群は28.1%であった（Table 2）。これと同じように行動の種別と割合を示した Strayer, Wareing, & Rushton (1979) をみても、内容が類似した行動として養護行動群に相当するものとして“友人に対する共感的行動”と、10種別でみた場合の②協力に相当するものとして“友人に対する協力行動”がある。それぞれの割合を比較してみると、本研究の②協力が20%に対して“友人に対する協力行動”は20.4%とほぼ同等の割合であった。一方、本研究の養護行動群が28.1%に対しては、“友人に対する共感的行動”が4.6%と違いがみられた。異なる観点で行動評価がなされているため、出現率に両研究で一貫性を持つのは難しいが、類似する行動種で6倍以上の違いがみられるのは注目すべき点であろう。

2. 向社会的行動の出現数における性差

向社会的行動の出現数を男女で比較したところ、協同行動群は男児が多く、養護行動群は女児が多く行動をとっていることが確認された。このような向社会的行動の性差については、Eisenberg & Fabes (1998)ⁱによると、Fabes & Eisenberg (1996)でのメタ分析の結果から、行動の種類によっては性差の効果量の大きさが異なり、性差が顕著になる向社会的行動とそうでないものがあると論じている。本研究においても性差がみられたものとみられなかったものがあった。性差がみられた理由の1つとしては、性別によって好む遊びが違うからであろう。特に協同行動が多く観察された遊びは、木片と泥を使って作る基地づくりであった。この遊びに参加する幼児は参加児の妹以外、全員男児であった。一方、養護行動は少数数での関わりのため集団の単位が多く、各

集団に女児が参加するという構成が多かった。このように幼児の遊びの好みや遊び方によって、向社会的行動の表現方法に違いがみられるとも考えられた。

一般的に、女性は男性より向社会的であるとのステレオタイプがあり（Eisenberg & Fabes, 1998; Zarbatany, Hartmann, Gelfand, & Vinciguerra, 1985）、向社会的行動をした場合の周りからの評価は男児と女児で異なる（Eisenberg, Cameron, Teyon, & Dodez, 1981）。本研究では女児の養護行動が多かったが、これについては将来の養護的役割のための生物学的な特徴や（Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner & Chapman, 1992）、女性性（femininn）に関わる性別バイアスによっても解釈することができる。こうしたステレオタイプに応じた女児の養護行動は、周りからの肯定的評価を受けやすく将来にわたって行動強化がなされていく可能性が考えられる。

3. 向社会的行動と対人的信頼感と親和動機の関連

本研究は対人的信頼感と親和動機といった他者に関わる内面的な要因が、向社会的行動の表出に関連するかについての検討を行った。その結果、対人的信頼感と向社会的行動との間に有意な関連は認められなかった。一方、親和動機は向社会的行動における養護行動群との関連が認められ、親和動機の低い幼児が多くの養護行動をとっていることが明らかとなった。これにより、養護行動を促進する上で親和動機を高めるための働きかけには効果が得られないことが予想される。同時に、幼児の向社会的行動は他者との親密性を求めて行われる行動というよりは、行動自体の実行への動機によって引き起こされている可能性が考えられる。これに関して、人間は生来的に援助的・協力的な性質をもつとの考えがある（Warneken & Tomasello, 2009）。Warneken & Tomasello (2006)は、発達早期の乳児であっても向社会的行動が実行可能であることを確認しており、さらに、アンダーマイニング効果を援用し、向社会的行動は外発的動機による行動というより内発的動機による行動であるともしている（Warneken & Tomasello, 2008）。本研究でも親和動機の高さが向社会的行動の表出を高めるとする結果がみられなかつ

たことから、その表出メカニズムを明らかにするためのさらなる検討が必要と考える。

4. まとめ

本研究では幼児の向社会的行動について、自然観察による行動評定を行った。観察は遊びの中での自発的な行動のみを記録したものである。しかし、自然観察という測定方法は行動実行に伴う報酬や賞賛などの外的要因による影響も指摘されている（浜崎, 1985）。同様に、他の測定方法についても言語課題と行動課題において結果が一致しないことや（Dreman & Greenbaum, 1973）、言語課題において用いる評定場面の不適切さ（浜崎, 1985）なども問題視されている。このように幼児の向社会的行動をどのように測定するかについては、今後、測定に付随する問題点を考慮した工夫が必要であろう。加えて、本研究は小規模集団を対象とした探索的な検討であったため結果は限定的なものであり、対象者数を増やした場合には結果が異なる可能性も考えられる。特に、4歳児のデータは説明が困難な部分が多いともされ（若林, 2005）、幼児の向社会的行動の測定や解釈においては慎重を期し、研究デザインを構築し検討を重ねることが求められる。

引用文献

- Dreman, S. B., & Greenbaum, C. W. 1973. Altruism or reciprocity: Sharing behavior in Israeli kindergarten children. *Child Development*, 44, 61-68.
- Eisenberg, N., Cameron, E., Tryon, K., & Dodez, R. 1981. Socialization of prosocial behavior in the preschool classroom. *Developmental Psychology*, 17, 773-782.
- Eisenberg, N., & Fabes, R. A. 1998. Prosocial development. In N. Eisenberg (Ed.), W. Damon (Series Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional, and personality development* (5th ed., pp. 82-101). New York: Wiley.
- Elliott, R., & Vasta, R. 1970. The modeling of sharing: Effects associated with vicarious reinforcement, symbolization, age, and generalization. *Journal of Experimental Child Psychology*, 10, 8-15.
- 藤枝静暁・新井邦二郎. 2009. 児童用親和動機尺度の開発. *発達臨床心理学研究*, 20, 1-9.
- 藤原亜希子・牧正興. 2007. 児童の対人的信頼感と対人行動に関する一考察－児童養護施設入所児と家庭児との比較を通して－. *福岡女学院大学大学院人文科学研究科「臨床心理学」* (4), 65-71.
- 浜崎隆司. 1985. 幼児の向社会的行動におよぼす共感性と他者存在の効果. *心理学研究*, 56, 103-106.
- 伊藤順子. 1997. 幼児の向社会的行動における他者の感情解釈の役割. *発達心理学研究*, 8 (2), 111-120.
- 伊藤順子. 2006. 幼児の向社会的性についての認知と向社会的行動との関連－遊びの場面の観察を通して－. *発達心理学研究*, 17, 241-251.
- 伊藤順子・丸山（山本）愛子・山崎晃. 1999. 幼児の自己抑制認知タイプと向社会的行動との関連. *教育心理学研究*, 47, 160-169.
- 厚生労働省. 2017. 保育分野の現状と取り組みについて. <https://www8.cao.go.jp/kisei-kaikaku/suishin/meeting/wg/hoiku/20170922/170922hoiku02.pdf> (2020年4月16日)
- 溝川藍. 2011. 4, 5歳児における嘔泣きの向社会的行動を引き出す機能の認識. *発達心理学研究*, 22, 33-43.
- 森下正康. 1990. 幼児の共感性が援助行動のモデリングにおよぼす効果. *教育心理学研究*, 38, 174-181.
- Murray, E. J. 1996. 動機と情緒. *現代心理学入門 3*. (八木晃 訳) 岩波書店. (Murray, E. J. 1964. *Motivation and emotion*. New Jersey: Prentice-Hall.)
- Owens, C. R., & Ascione, F. R. 1991. Effects of model's age, perceived similarity, and familiarity on children's donating. *Journal of Genetic Psychology*, 152, 341-357.
- Peterson, L. 1980. Developmental changes in verbal and behavioral sensitivity to cues of social norms of altruism. *Child Development*, 51, 830-838.
- 酒井厚・菅原ますみ・菅原健介・木島伸彦・眞榮城和美・詫摩武俊・天羽幸子. 2003. 子どもによる親への対人的信頼感－児童・思春期の双生児を対象とした人間行動遺伝学的検討－. *発達心理学研究*, 14, 191-200.
- 島義弘・黒岩悠. 2017. 幼児の向社会的性の発達：実験室実験と自然観察による検討. *鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要*, 26, 43-54.

- Strayer, F. F., Wareing, S., & Rushton, J. P. 1979. Social constraints on naturally occurring preschool altruism. *Ethology and Sociobiology*, 1, 3-11.
- 首藤敏元. 1995. 幼児の向社会的行動と自己主張－自己抑制. 日本性格心理学会発表論文集, 4, 88-89.
- 谷冬彦. 1998. 青年期における基本的信頼感と時間的展望. 発達心理学研究, 9, 35-44.
- 若林紀乃. 2003. 思いやりを上手く表現できない幼児－思いやりの表現方法の分析から－. 幼年教育研究年報, 25, 55-61.
- 若林紀乃. 2005. 幼児の向社会的行動表出（思いやり表現）の発達－行動方略選択の経緯に関する縦断研究－. 心理科学研究会2005年春季研究会集会概要, 26（2）, 89-90.
- Warneken, F., & Tomasello, M. 2006. Altruistic helping in human infants and young chimpanzees. *Science*, 311, 1301-1303.
- Warneken, F., & Tomasello, M. 2008. Extrinsic rewards undermine altruistic tendencies in 20-month-olds. *Developmental Psychology*, 6, 1785-1788.
- Warneken, F., & Tomasello, M. 2009. The roots of human altruism. *British Journal of Psychology*, 100, 455-471.
- 渡辺弥生・高野清純. 1986. 児童における援助行動と動機について. 筑波大学心理学研究, 8, 81-86.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., Wagner, E., & Chapman, M. 1992. Development of concern for others. *Developmental Psychology*, 28, 126-136.
- Zarbatany, L., Hartmann, D. P., Gelfand, D. M., & Vinciguerra, P. 1985. Gender differences in altruistic reputation: Are they artifactual? *Developmental Psychology*, 21, 97-101.
-
- ⁱFabes, R. A., & Eisenberg, N. 1996. An examination of age and sex differences in prosocial behavior and empathy. Unpublished data, Arizona State University. の分析結果をもとにしている。

抄 録

本研究は保育園に通う4, 5歳児を対象に、遊びの中でみられる向社会的行動についての調査を行った。園庭での自然観察の結果、向社会的行動には手伝い、協力、共有、分与、教示、提案、誘い、養護、気遣い、励ましの10種類の行動が確認された。さらに、類似性の高いものでまとめた3行動群を設定し、性別、他者に対する意識（対人的信頼感と親和動機）との関連を検討した。その結果、協同行動群は男児が女児よりも多く、養護行動群は女児が男児よりも多くの行動をとっていることが分かった。加えて、養護行動群は親和動機の低い幼児が高い幼児よりも多くの行動をとっていることが明らかとなった。これらより、向社会的行動の表出には性差があること、また、親和動機を高めることは向社会的行動の促進に効果がないことが明らかとなった。本研究は小規模集団における向社会的行動の傾向を示したものであり、知見の一般化にはさらなる検討が求められる。

キーワード：向社会的行動，対人的信頼感，親和動機，就学前児